ロボットと人の共生には個性が必要だ

Matching HUB Kanazawa 2016

於:ANA ホテル金沢

金沢大学教育担当理事(副学長)
柴田正良　Nov., 1st. 2016

話の流れ

1. 個性なくして、世界は進化するのか？
2. 人間における個性の位置
3. ロボットの個性の有無がもたらす帰結
4. 道徳共同体と、進化の新しいステージ（？）

個性の存在論的な位置

- 個性とは、個体のある同一性を前提し、しかもその同一性を損なわないような、性質の差異のことである。

- その同一性のレベルは様々であり、都市や生物種のようなものから、人間やミクロ物質まであるだろう。

- 例えば、中世ヨーロッパの城郭都市である点で同一のａとｂは、自由市場の広さＡの点で異なることがある。それが、2つの都市の個性を形づくる。
- 同様に、日本人という点で同一の２人の人物は、「鷹揚さ」という性質の点で個性の違いがありうる。

進化を可能とする差異

- 時空位置でしか区別できない一種類の同一物、例えば、ある素粒子 α しか存在しない可能世界があるとしよう。そこで、物質の進化は起きるだろうか？

- もしその世界が、α の離合集散によって別のいかなる種類の物質 β も生み出されないような世界だとすれば、多分、そこで物質進化は起きないだろう。

- われわれの世界では、生物進化を可能とするほどに個体の同一性は性質の差異を許容し、その差異のおかげで、やがて別の同一性（種）が創造される。

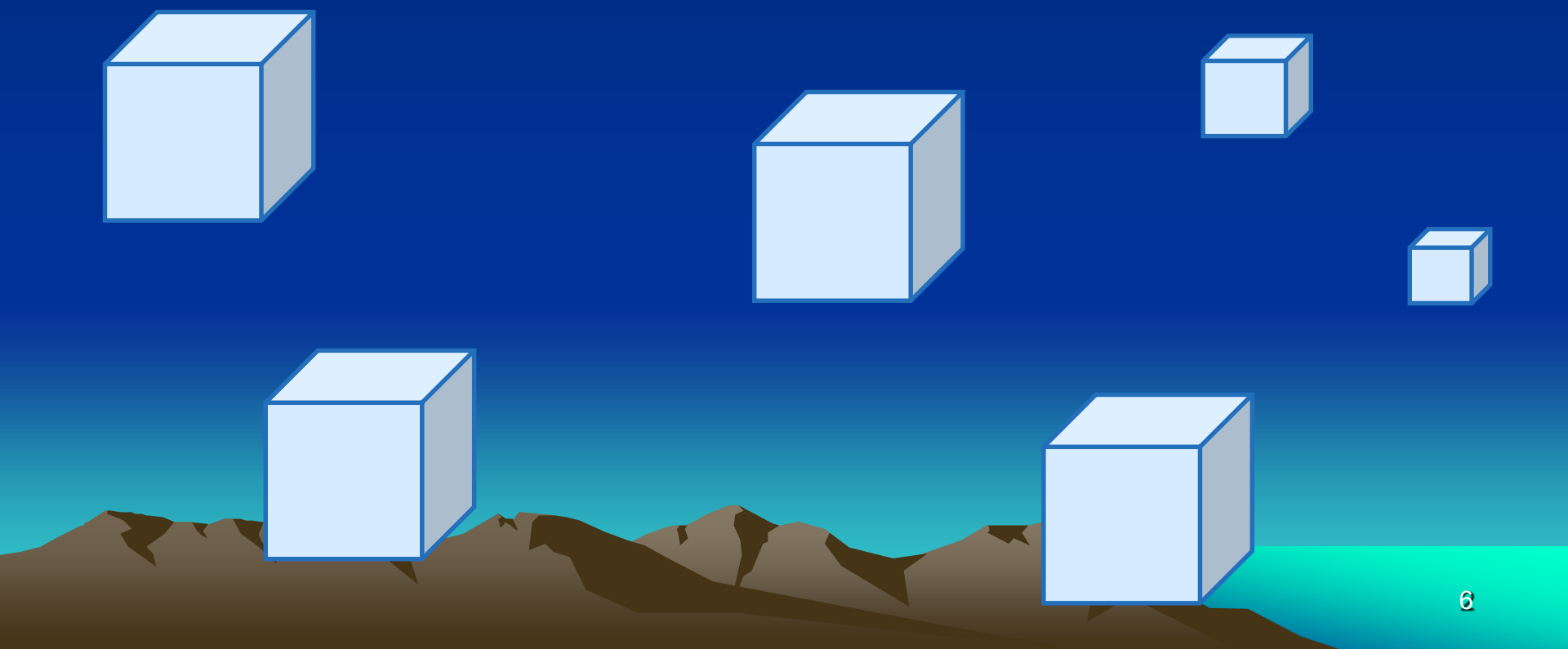
人類における社会進化

- 進化自体を考えるなら、生物進化においても、個性程度の差異は、進化にとって必要でも十分でもないだろう。
- 魚類や社会性昆虫における、個性なき大量の産卵と大量の死滅もまた、進化戦略の一つである。

- しかし、少数の個体を大事に育てる進化戦略の下では、それぞれの個体の存在が大きな重要性をもつ。
- そうした個体が相互に識別不可能であるとしたら？

- その場合、生物体としての進化はもちろん、個体相互の関係性としての「社会システム」の進化も、生ずることはないだろう

人類の個体がこのようにほぼ識別不可能ならば、社会性昆虫のような役割の差異もなく、個体間の関係性における進化も、なかったであろう。
個体間の差異の調整に、特別な「作法」は必要ないからだ。



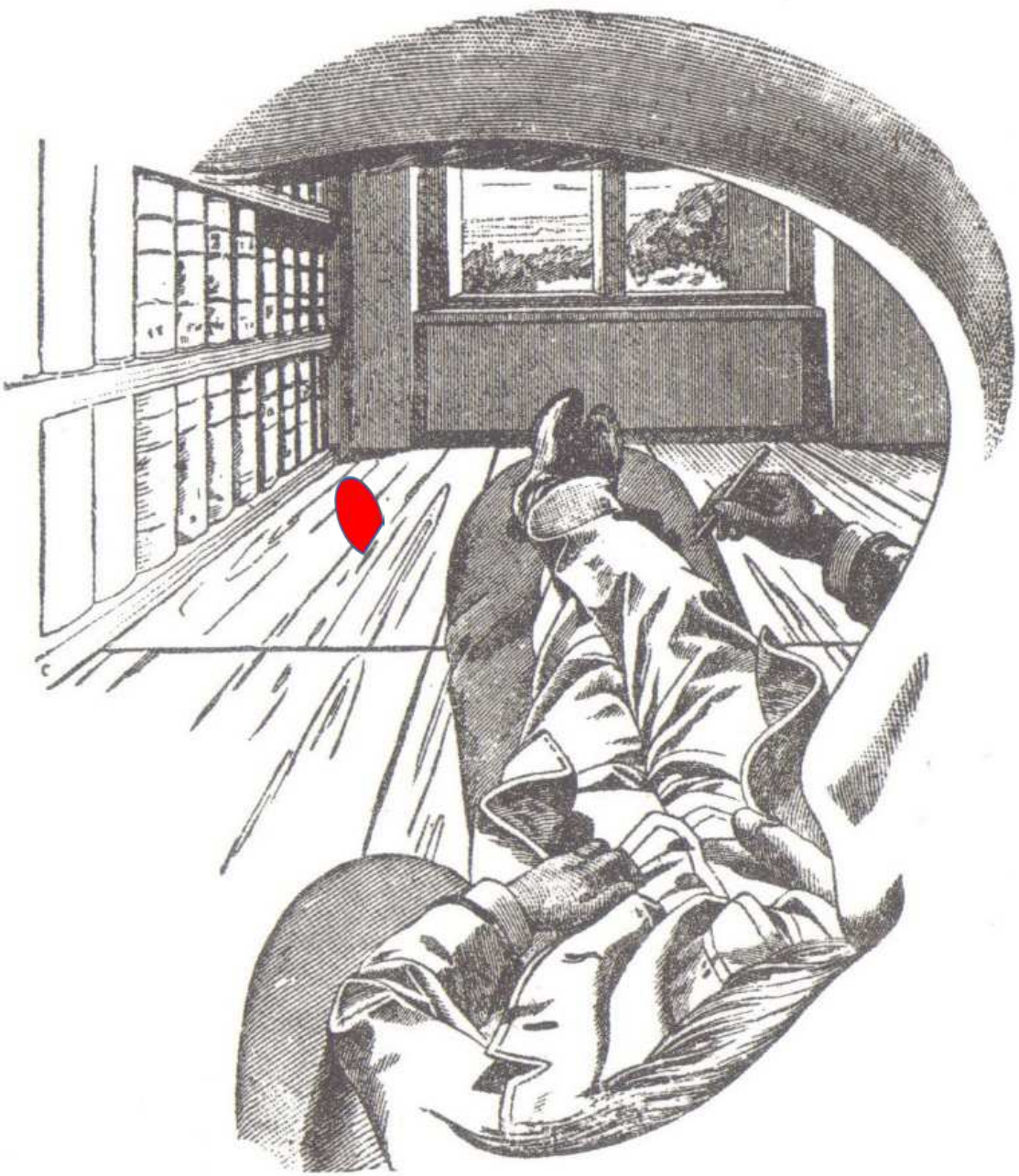
個体における差異、個性こそがあらゆる目的の源泉である

- われわれの世界では、人類にあっても、自己の遺伝子の最大限の時空的拡散と存続が、個体の究極的な生存目的である（ドーキンス）。
- しかし、そのはるか上層で生きているわれわれ人間の社会においては、個人の活動の目的を定めているのは、個人間における差異、つまり個性である。

- 個性は、人が目指し、欲求し、反発し、避けようとするものの原因である。個性相互の相違と衝突を調整するために、様々な社会システムが存在し、倫理と法が存在する。
- そして個性は、素朴心理学的な経験主体であるということ、つまり一人称的な「視点」をもつということの内に、最も先鋭に宿る。

一人称的視点

赤いレモンの
あるあなたの
経験世界



「スターウォーズ」のロボットでさえ個性を持つ

- ドロイド（ロボット）たちの中でも、バトル・ドロイドは、最もロボットらしいロボットで、恐ろしいほどの画一さ、命令への絶対服従、無感情さに特徴があり、短期間での大量生産に向いている。
- この点で、経験を重ねたC-3POやR2-D2とは大違い。
- 人がロボットと共生する場合、高度な道具としての存在をそのロボットに求めるわけではないだろう。人がペットに求めるものも、画一的で、識別不可能で、代替可能な猫や犬ではない。
- われわれ自身も、偶然性の中に出現する個性を生きるし、そのような個性を求める。個性はわれわれの人生である。

もしロボットに個性がなかったら？

- 個性のないロボットと付き合うのは、靴や食器や、服やパソコンに接するのと大差がない。それは、道具を使い、消費するのと同じことだ。

- 知的に見えるどんな会話も、ある程度長い付き合いには耐えられない。それは、決して、自分の共生の相手、パートナーとはならないだろう。

- それは、それ自体が他のために存在するのではなく、それ自体のために存在するような、価値の源泉ではありえない。
- また、人の存在を時として脅かす「眼差し」の根拠でもありえない。

それは、一人称的な「視点」、一人称的な経験世界をもっていない

しかし、もしロボットが個性をもったら？

- 自律性と知性をもち、さらに個性すら持ったなら、そのロボットはまさにパーソン（person）である。つまり、われわれの社会のメンバーとしての行為主体（認知的行為者）である。
- しかし、それが人間に対する悪意や敵意を持っていたら？
- ロボットの方が、いまや知力も体力も人間より上であり、人間より丈夫で、過酷な環境にも耐えられる。
- 多くのSF映画で描かれてきたような、ロボットによる人間支配、人間の殲滅が現実に生じないだろうか？
- つまり、人類の破滅が？

ロボットとの道徳共同体

- 人間の破滅を回避する2つのシナリオ

- 1.　ロボットが個性をもったパートナーとなる手前で、ロボット開発を禁止する。封印された人類の技術として。
- しかし、これはほぼ確実に失敗するだろう。人間は、違法だとしてもロボット開発を止めないだろう。そういう生き物なのだ、われわれは。

- 2.　ロボットとともに、一つの道徳共同体を創る。そこで、人間とロボットは原理的に同じ権利と義務をもつ。
- 幼児や認知症の老人のように、われわれは、その道徳共同体の中で「劣った」メンバーかもしれない。しかし、この道徳共同体が創れなければ、ロボットとの共生の道はない。

ロボットと道徳

- 道徳は自然化（自然科学化）できないし、妥当な公理も、そこから導出するための確実なアルゴリズムも存在しない。 道徳は計算ではなく態度である。

- では、ロボットは、どうやって道徳を身に付けるのか？

- われわれと同様に、経験によって道徳的センスを身に付ける以外はないだろう。人間にしても、生得的な道徳プログラムを持っているわけではない。

- 「われわれの経験」とは素朴心理学的 (folk psychological) な経験であり、日常の目的、欲求、手段に関する、他の道徳的行為者との調整の経験である。

進化の新しい道（？）

- われわれにとって一番大事なのは、もはや自分の遺伝子ではなく、自分の意識であるかもしれない。
- 同じように、進化にとって大事なのはもはや生物素材の改良ではなく、素材から自由な意識装置の改良かもしれない。
- つまり、人類にとって進化の次のステージは、「機械ともに」どころか、「機械となって」かもしれない。
- 生物身体から完全に解き放たれ、ロボットの電子頭脳にインストールされた「あなたの意識」・・・それが人類の未来かもしれない。

おしまい

柴田の研究関連webサイト

http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/